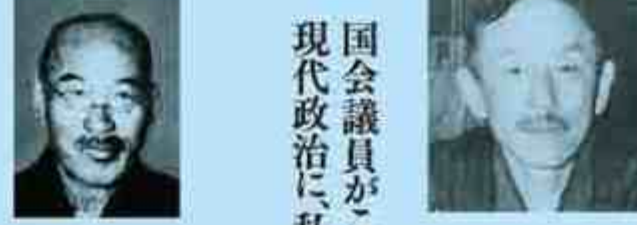




近代日本メディア議員列伝

(全15巻)

佐藤卓己 編集
(京都大学大学院教授)



明治から戦後にかけて、(政治のメディア化)を体現したメディア議員たちを取り上げ、一人につき一冊まるごと割り当てて深掘りする、これまで無かった人物列伝!



佐藤卓己氏の単独編集による完全書下ろし新シリーズ、いよいよ創刊!!

四六判・上製 各巻平均 350頁
各巻予価：2,970円(本体2,700円)
2023年6月刊行開始



この〈新〉列伝を推薦します

(50言語・繁体語)



「メディア議員列伝」への期待
有山輝雄 (メディア史研究者)

文字・画像・映像などの大量複製技術を利用したメディアの登場が社会、文化などのあり方を大きく変えたことは改めて言うまでもないことだが、政治においては政治行為の演劇化をもたらす。政治家達は政治運動であろうが国会の議場だろうが、劇場の俳優のように演技することが当然のこととなる。天性として演技力にたけた人物、自らメディア活動に従事し自己演出技術などを習得した人物が政治の世界で大きな役割をはたすのである。この「メディア議員列伝」シリーズはメディアという切り口から様々な政治家たちの横断面を明らかにしようとする大胆な試みである。政治史研究、メディア史研究に大きな刺激をあたえることを期待する。



デモクラシー—総力戦、戦前—戦後の連関を問い直す
藤野裕子 (早稲田大学教授)

劇場型政治、ポピュリズム—現代の政治・選挙のあり方をさかのぼれば、戦前の「メディア議員」に行き着く。明治以来、新聞と議員は密接につながっていた。デモクラシーと大衆社会化が同時に進展した大正期、マスメディアの力は有権者を動かす政治力となり、1930年代には総力戦への動員力にもなった。そう、「メディア議員」は政治—社会の交点に位置づいた。世代・思想の異なる14人の議員の評伝は、政治史・文化史を架構し、デモクラシー—総力戦、戦前—戦後の連関を問い直す。必読のシリーズである。



政治の言葉が遠く隔たってしまった歴史的分岐点を探る
與那覇潤 (評論家・元歴史学者)

かつて、あらゆる「書くこと」は政治だった。筆を執るものはみな、文字や言葉の使い手であることの誇りと、読み手の心を動かそうとする情熱に焦がれていた。しかしいま、私たちの言葉と政治の現場で語られる言葉とは、遠く隔たってしまった。どこで間違いがあったのか。違う可能性はなかったのか。明治から戦後までの歴史に分岐点を探り、「ジャーナリスト出身」の議員たちの格闘を掘り起こす探索の旅に期待します。



『近代日本メディア議員列伝』刊行にあたって 佐藤卓己

メディア議員とは「メディア経験をもつ代議士」あるいは「議席をもったジャーナリスト」である。新聞社、雑誌社、放送局などメディアでの経験を足場に政治家となったメディア議員の計量分析および集团的考察については、すでに佐藤卓己・河崎吉紀編「近代日本のメディア議員——「政治のメディア化」の歴史社会学」(創元社・2018年)でまとめている。その副題にもある「政治のメディア化」とは、政治が価値や理念の実現ではなく、効果や影響力の

最大化を目指して展開されていく状況を意味する。その状況を体現するのがメディア議員と言えよう。意外と感じる人も多いだろうが、満洲事変から太平洋戦争までの時期の衆議院でメディア議員は全議席の3割を超えていた。

それは注目すべき現象と言えるが、これまでメディア議員の研究はほとんど行われていない。その理由は想像できる。政治の視点で見れば、理念よりも影響力を重視する政治はポピュリズム(大衆迎合主義)であり、それを体現する議員はまともな政治家とはみなされない。ジャーナリズムの視点で、その扱いはさらに困難である。メディアに「権力の監視役」、「不偏不党」、「体制批判」を求めるなら、メディアと政治の境目が無いメディア議員はグレーゾーンの存在だからである。しかし、今日私たちが目にする政治家はSNSで日々刻々と情報を発信するだけであり、その多くは理念よりも影響力を重視している。そうしたウェブ体験を経て当選した議員は、多かれ少なかれメディア議員ではないだろうか。

この「近代日本メディア議員列伝」はそうした現代政治に直結する問題意識から企画されたシリーズである。なぜこの14人が選ばれたかは各巻で説明するが、必ずしも大物政治家を選んでいない。近代日本のメディア議員としては、原敬(『大東日報』主筆)、犬養毅(『郵便報知新聞』記者)、加藤高明(『東京日田新聞』社長)、石橋湛山(『東洋経済新報』社長)など首相経験者も少なくない。そうした大物よりも、「政治のメディア化」の多様な問題点を多角的に示せるように選んだつもりである。本シリーズがメディア社会に生きる私たちの現代政治への向き合い方に役立つものとなることを願っている。

佐藤卓己

1960年、広島県生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。東京大学新聞研究所助手、同志社大学文学部助教授、国際日本文化研究センター助教授などを経て、現在は京都大学大学院教育学研究科教授。専攻はメディア史、大衆文化論。2020年にメディア史研究者として著経歴賞を受賞。著書に『大衆宣伝の神話』(ちくま学芸文庫)、『現代メディア史』(岩波テキストブック)、『キング』の時代(岩波現代文庫)、日本出版学会賞・サントリー学芸賞受賞)、『言論統制』(中公新書、吉田茂賞受賞)、『八月十五日の神話』(ちくま学芸文庫)、『輿論と世論』(新潮選書)、『ファシストの公共性』(岩波書店、毎日出版文化賞受賞)、『負け組のメディア史』(岩波現代文庫)など多数。

全巻構成

- 1巻◆片山慶隆 『大石正巳の奮闘——自由民権から政党政治へ』
- 2巻◆井上義和 『降旗元太郎の理想——名望家政治から大衆政治へ』
- 3巻◆河崎吉紀 『関和知の出世——政論記者からメディア議員へ』
- 4巻◆戸松幸一 『古島一雄の布石——明治の俠客、昭和の黒幕』
- 5巻◆白戸健一郎 『中野正剛の民権——狂烈政治家の侍持』
- 6巻◆佐藤卓己 『池崎忠孝の明暗——教養主義者の大衆政治』
- 7巻◆赤上裕幸 『三木武吉の裏表——輿論指導か世論喚起か』
- 8巻◆佐藤彰彦 『石山賢吉の決算——ダイヤモンドの政治はあるか』
- 9巻◆福岡良明 『西岡竹次郎の雄弁——苦学経験と「平等」の通説』
- 10巻◆石田あゆう 『神近市子の猛進——婦人運動家の隘路』
- 11巻◆松尾理也 『橋本登美三郎の協同——保守が夢見た情報社会』
- 12巻◆松永智子 『米原視の革命——不実な政治が自派なメディアか』
- 13巻◆山口 仁 『田川誠一の挑戦——保守リベラル再生の道』
- 14巻◆長崎助朗 『上田哲の歌声——Why not protest?』
- 15巻◆河崎吉紀 『近代日本メディア議員人名辞典・付総索引』

創元社 〒541-0047大阪市中央区淡路町4-3-6 TEL 06-6231-9010 FAX ご注文は今すぐ!! 06-6233-3111
https://www.sogensha.co.jp/【東京支店】〒101-0051東京都千代田区神田神保町1-2 田辺ビル TEL 03-6811-0662

※この注文書でお近くの書店さまへご注文ください。書店ご不便の場合は直送もいたします(詳細は創元社WEBサイトをご確認ください)。

創元社単巻申込書	創元社WEBサイト https://www.sogensha.co.jp/
〒	
TEL	
フリガナ	
お名前	

創元社単巻申込書

<p>創刊</p> <p>近代日本メディア議員列伝 第1回配本 池崎忠孝の明暗——教養主義者の大衆政治 [6巻]</p> <p>ISBN978-4-422-30106-8 C0336 定価2,970円(本体2,700円)※</p>	<p>取り扱い店名</p>
<p>近刊</p> <p>近代日本メディア議員列伝 第2回配本 降旗元太郎の理想——名望家政治から大衆政治へ [2巻]</p> <p>ISBN978-4-422-30102-0 C0336 定価2,970円(本体2,700円)※</p>	<p>冊</p>

第1回記念本 6巻 佐藤卓己(京都大学大学院教育学研究科教授)

『池崎忠孝の明暗——教養主義者の大衆政治』

【2023年6月】 ISBN978-4-422-30106-8 C0336

池崎忠孝 1891(明治24)年～1949(昭和24)年。岡山県生まれ。六高・東京帝大を卒業。道石門下の「赤木柘平」として活動。「萬朝報」論説記者、「大阪時事新報」顧問を経て衆議院議員、文部参与官、A級戦犯容疑で集賢館プリズンに入る。

第2回記念本 2巻 井上義和(帝京大学共通教育センター教授)

『降旗元太郎の理想——名望家政治から大衆政治へ』

【2023年8月】 ISBN978-4-422-30102-0 C0336

降旗元太郎 1864(元治2)年～1931(昭和6)年。信濃国(長野県)生まれ。漢学者・武居用拙のもとで民権思想を学び、東京専門学校卒業後、「信濃日報」社長を続けながら衆議院議員当選11回。大隈系代議士として普通選挙の実現に尽力。

第3回記念本 5巻 白戸健一郎(筑波大学人文社会科学系准教授)

『中野正剛の民権——狂野政治家の内幕』

【2023年11月】 ISBN978-4-422-30105-1 C0336

中野正剛 1886(明治19)年～1943(昭和18)年。福岡県生まれ。修政館・早稲田大学を卒業後、「東京朝日新聞」記者、「東方時論」主筆。「九州日報」社長。衆議院議員当選8回。東方便会を結成し南進論を唱え、日米開戦後は東条英機と対立。

第4回記念本 7巻 赤上裕幸(関西大学校人文学部社会科学公共政策学専攻准教授)

『三木武吉の裏表——輿論指導か世論喚起か』

【2024年1月】 ISBN978-4-422-30107-5 C0336

三木武吉 1884(明治17)年～1956(昭和31)年。香川県生まれ。東京専門学校を卒業。憲政会幹事長を務め、東京市政を牛耳るが、京成電車乗入事件で実刑判決を受け、失脚。「報知新聞」社長。戦後は職業師の異名で保守合同を実現。

第5回記念本 3巻 河崎吉紀(同志社大学社会学部教授)

『関和知の出世——政論記者からメディア議員へ』

【2024年3月】 ISBN978-4-422-30103-6 C0336

関和知 1870(明治3)年～1925(大正14)年。千葉県生まれ。東京専門学校卒業後、「新報」を創刊。プリンストン大学へ留学し、「萬朝報」記者、「東京毎日新聞」編集長を経て議員となる。司法副参政官、憲政会総務、陸軍政務次官を務めた。

第6回記念本 11巻 松尾理也(大阪芸術大学短期大学部メディア芸術学科教授)

『橋本登美三郎の協同——保守が夢見た情報社会』

【2024年5月】 ISBN978-4-422-30111-2 C0336

橋本登美三郎 1901(明治34)年～1990(平成2)年。茨城県生まれ。早稲田大学卒業後、「朝日新聞」記者。潮来町長を経て衆議院議員当選12回。内閣官房長官、建設相、運輸相のち自民党幹事長となるが、ロッキード事件で有罪判決。

第7回記念本 9巻 福岡良明(立命館大学産業社会学部教授)

『西岡竹次郎の雄弁——苦学経験と「平等」の逆説』

【2024年7月】 ISBN978-4-422-30109-9 C0336

西岡竹次郎 1890(明治23)年～1958(昭和33)年。長崎県生まれ。早稲田大学在学中に雄弁会で活躍。卒業後、雑誌「青年雄弁」および「長崎民友新聞」を創刊し普選運動に尽力。衆議院議員当選6回。戦後、長崎県知事。

第8回記念本 13巻 山口仁(日本大学法学部准教授)

『田川誠一の挑戦——保守リベラル再生の道』

【2024年9月】 ISBN978-4-422-30113-6 C0336

田川誠一 1918(大正7)年～2009(平成21)年。神奈川県生まれ。慶應義塾大学卒業後、「朝日新聞」記者となり同社労組委員長。新自由クラブ結成に参加。自民党連立内閣(第2次中曾根内閣)で自治相。衆議院議員当選11回。

第9回記念本 8巻 佐藤彰彦(流通科学大学人間社会学部専任講師)

『石山賢吉の決算——ダイヤモンドの政治はあるか』

【2024年11月】 ISBN978-4-422-30108-2 C0336

石山賢吉 1882(明治15)年～1964(昭和39)年。新潟県生まれ。慶應義塾商業学校卒業後、「実業の世界」記者。経済雑誌「ダイヤモンド」を創刊。東京市会議員を経て衆議院議員となるが公職追放。日本雑誌協会初代会長。

第10回記念本 12巻 松永智子(東京経済大学コミュニケーション学部准教授)

『米原利の革命——不実な政治か真摯なメディアか』

【2025年1月】 ISBN978-4-422-30112-9 C0336

米原利 1909(明治42)年～1982(昭和57)年。鳥取県生まれ。旧制一高在学中に社会主義へ傾倒。中退して地下活動。戦後日本共産党に入党し「赤旗」記者を経て衆議院議員(当選3回)。国際機関誌編集長など歴任。

第11回記念本 10巻 石田あゆむ(横浜国立大学社会学部教授)

『神近市子の猛進——婦人運動家の隘路』

【2025年3月】 ISBN978-4-422-30110-5 C0336

神近市子 1888(明治21)年～1981(昭和56)年。長崎県生まれ。女子英学塾在学中に青鞥社参加。「東京日日新聞」記者となり。大杉栄を刺傷して著名に。戦後は民主婦人協会を設立、左派社会党で赤審防止法成立に尽力。

第12回記念本 14巻 長崎勲彦(横浜国立大学社会学部准教授)

『上田哲の歌声——Why not protest?』

【2025年5月】 ISBN978-4-422-30114-3 C0336

上田哲 1928(昭和3)年～2008(平成20)年。東京都生まれ。京都大学卒業後、NHKに入局。ポリオスワクテンのキャンペーンを指揮した。労組委員長として「NHKの閣内閣」の異名をとる。参議院議員を経て衆議院議員当選5回。

第13回記念本 1巻 片山慶隆(関西外国語大学英語国際学部教授)

『大石正巳の奮闘——自由民権から政党政治へ』

【2025年7月】 ISBN978-4-422-30101-3 C0336

大石正巳 1855(安政2)年～1935(昭和10)年。土佐藩(高知県)生まれ。立志学舎で学び、自由民権運動に従事。「自由新聞」社長、駐朝鮮公使、農商務大臣を歴任。憲政本党、立憲国民党などで幹部を務めた。衆議院議員当選6回。

第14回記念本 4巻 戸松幸一(株式会社もくようし代表)

『古島一雄の布石——明治の俠客、昭和の恩恵』

【2025年9月】 ISBN978-4-422-30104-4 C0336

古島一雄 1865(慶応元)年～1952(昭和27)年。兵庫県生まれ。杉浦重剛に私淑し「日本人」「日本新聞」「萬朝報」等の記者として活躍。立憲国民党および革新倶楽部に所属し、普通選挙法確立のために尽力。のち貴族院勸選議員。

第15回記念本 15巻 河崎吉紀(同志社大学社会学部教授)

『近代日本メディア議員人名辞典・付総索引』

【2026年1月】 ISBN978-4-422-30115-0 C0336

※予定は変更となる場合がございます。

政治学、社会学、メディア学・マスコミ研究、近現代史、公共図書館、大学図書館、高校図書館、高校図書館

おすすめします



池崎忠孝の明暗

教養主義者の大衆政治

佐藤卓己

本シリーズの特長

- ・著名だが新たな像を刻める議員、典型的だが評伝の少ない議員、県紙経営型、女性、保守本流、左翼系、雑誌経営型など様々なタイプの14名を取り上げ、メディアと政治が不可分の時代に、現代政治家のモデルとも反面教師ともなるメディア政治家像を提起する。
- ・〈教育〉〈メディア〉〈政治〉の観点から各議員にアプローチ。シリーズ全体で一体感をもって読めるよう配慮した構成。
- ・注釈は付けずに読みやすい文章を心掛けた。人物評伝ならではの読みやすい文章。
- ・定評ある研究者が執筆陣に集結。丹念な資料探索をもとに各議員の知られざる一面を活写する。
- ・各巻末には「著作年譜」を収録。議員の生涯と著作一覧があわせて一瞥できる。

作家 政治家をめざした文筆家



右: 図 0-1 石田三成顕彰碑(題字・横田邦彦文部大臣)、池崎忠孝(假説石田三成) クラビアより
上: 図 0-2 石田三成顕彰碑建立奉祝会にて池崎忠孝の書(徳明寺蔵)



その解説パネルには「衆議院議員池崎忠孝」の名がはっきりと書き込まれている。

「この碑は昭和十六年十一月とよきの滋賀県知事近藤廉太郎、顕彰会長下郷佐平、衆議院議員池崎忠孝氏等のご尽力で建立された石田三成公顕彰碑です。表の題額は文部大臣橋田邦彦先生の書になり、裏は文学博士渡辺世祐先生の撰文を当時の滋賀県知事近藤廉太郎先生が書かれています。」
この石田三成顕彰碑を推進した中心人物は、内務官僚の官選知事・近藤廉太郎や貴族院多額納税者議員で長浜町長・下郷佐平ではない。大阪府第三区選出の衆議院議員・池崎忠孝である。その顕彰碑から少し離れた山麓に池崎忠孝の墓もある。徳明寺の二住職が顕彰碑建立時に書かれた池崎の色紙を見せてくれた(図0-2)。池崎は暮末に米岡留学する甥に向けた横井小楠の送別辞から次の言葉を力強い筆致で切り出している。
「堯舜孔子之道、何ぞ富国に止まらん、何ぞ強兵に止まらん、大義を四海に布かんのみ。」

相見本(原寸大)



2 文治派・石田三成の顕彰——「假説石田三成」(一九四二年)

文治維新の顕彰碑と文部参与官の墓
二〇二三年二月四日、私は徳明寺から徒歩数分の石田三成公出生屋敷跡に池崎忠孝(一九四二年)を手にして立った。同書は「太平洋戦争の関ヶ原」ミッドウェー海戦が「衆議院議員・元文部参与官」の肩書で発行されている。若書きの評伝「夏目漱石」や「布る」に「足らず」より、衆議院議員の「假説石田三成」がメディア議員評伝の目的に達した。「軍事評伝を書く文教議員」の生涯が「武功を求めた文治派」のそれに重なるから、石田三成公出生屋敷跡には、一九四一年に建立された巨大な顕彰碑(図0-1)がいまも屹立している。

らに日本、アジア——にこだわった文筆家、政治家だった。まず「激闘十弟子」赤木柘平の評伝「夏目漱石」(一九四二年)を手にとった。漱石の墓のある池袋の雑司が谷霊園を思い、さらに「前垂れ掛け法学士」池崎忠孝の出世作「米国情」(一九四二年)を持って大阪府東区豊人橋二丁目の池崎商店跡を考えた。雑司が谷の漱石に雲がなく、豊人橋二丁目は大阪大空襲で風景が一変している。その生きざまの痕跡が池崎家の菩提寺・徳明寺のある滋賀県長浜市石田町に決めた。



相見本(70%に縮小)

